

(社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第72号 (2012年6月20日)

定例研究会のご案内

東洋音楽学会西日本支部第257回定例研究会

日 時：2012年7月21日(土) 午後1時半～5時

場 所：京都教育大学 D4 講義室

J R 藤森駅下車徒歩約10分、京阪電鉄墨染駅下車徒歩約7分

例会担当：田中 多佳子 (京都教育大学)

《講演》

尺八の国際化にみる楽器の分化と音楽種目再編への提案

——国際尺八フェスティバルを中心に (実演付き)

志村 哲 (大阪芸術大学)

《研究発表》

1. 近世三方楽所の成立過程

山田 淳平 (京都大学)

2. 近代における人形芝居 (非義太夫系) の展開

——甚目寺人形 (説教源氏節) を例に

藪田 郁 (大阪大学)

3. 近現代における評弾の伝承について——調の分析を中心に

垣内 幸夫 (京都教育大学)

* * * * *

定例研究会の記録

東洋音楽学会西日本支部第255回定例研究会

日 時：2012年 3月11日（日） 午後1時半～5時

場 所：国立民族学博物館 第3セミナー室

例会担当：寺田 吉孝（国立民族学博物館）

《研究発表》

死者を送る「うた」の表象とその技法

——中国雲南省徳宏タイ族のシャマニズムの事例

伊藤 悟（総合研究大学院大学）

〈要旨〉

本研究の目的は、徳宏タイ族社会のヤーモット（シャマン的宗教職能者）が送霊儀礼ソンコーカオにおいてうたう即興の歌を事例として取り上げ、聴衆の「カオ・ザウ」という快感の感性的体験の生成について考察し、イメージと感性の社会的特徴を明らかにすることである。

送霊儀礼は人の死後7日目以降に、死者を霊界に送り届けて祖霊に加えるために、ヤーモットを家に招いて行われる。儀礼は昼から深夜にかけてヤーモットによる10時間以上の歌によって構成されている。歌の内容は、死者が守護霊に導かれて、様々な関所を通過して人間界から霊界に旅するものである。その特徴として、ヤーモットはロンシンという技法を用い、自らの身体と不可知の次元を旅する守護霊の感覚器官を同期させ、その旅の様子を即興の歌という形式を用いて儀礼参加者に実況中継して聴かせる。歌には大まかなプロットはあるが、固定していない。歌は単なる状況描写に終始せず、死者や様々な非-人である霊的存在による発話がある。場合によっては歌の中の登場者が聴衆たちに語りかけることもあり、歌の進行は聴衆との相互作用によって進展する。

発表では、歌が表象する次元と現実世界の交錯において引き起こされる人と非-人の動的な関係性について具体的に考察を行った。特に、ロンシンという技法に着目してヤーモットと霊という主体と客体の関係がどのような論理によって攪乱されるのかを分析し、さらに、人びとが体験する虚構のはずの死者や精霊が実在として聴衆に働きかけ、働きかけられるという感性の作用について、ヤーモットと聴衆の関係性の変化から分析した。

(伊藤 悟 記)

〈報告〉

調査地で「葬式があったら教えてください」と尋ね歩くことはなかなか難しい。現地の一般住民には、人の不幸を望んでいるように受け取られかねないからだ。相当の年月と信頼関係を要する困難なテーマであり、発表者が葬送歌の実態を克明に示したことは大きな成果であろう。

冒頭、葬儀で遺体に突きかける悲痛な女性達と対照的にゲームに打ち興じる男性達、墓への野辺送り、ついでソンコーカウ（葬霊儀礼）の二事例が映像で示される。

第一例では、死霊が直接シャーマンに憑依し、「死んでしまえば二度と会えないのだね」などと一人称でうたう。これは日本の口寄せに近い。

第二例では、死者を冥界まで送り届ける苦難の旅がうたわれる。シャーマンは旅を導く守護霊と同調し（ロンシェンの技法）、その感覚や体験を共有して人間のことばに「翻訳」するのだという。村の門を出て沼地や荒野、毒虫などと対峙し、海や地獄、川や泉等を経て、ついに母の家にとどりつくまで、3～7日間を要する旅だといわれる。一定のプロットはあるが、即興で演じられる。興味深いのは、その過程で様々な精霊や死霊、祖霊たちが登場し、発話すること。また聴衆がヤジをとぼしたり、質問・叱咤激励したりして、直接パフォーマンスに関与することである。問答をとおして死の原因の究明、占い、遺産の贈与などもなされる。霊との交感の中で忘我のカオ・ザウ（歌が心に入る）状態がひきおこされ、生者（聴衆）の魂が遊離し、呼び戻して連れて帰らねばならないこともあるという。

以上10時間にも及ぶ長大な歌謡の生成の過程を、発表者はこの地域で盛んな短詞型歌謡の掛け合いの枠組みで説明しようとする。もちろん旋律法や修辞法など、共通のベースもあろう。しかし私には、基本は独り歌であり、むしろ長詞型の叙事的な歌謡ととらえてよいのではないかと思われる。確かに聴衆との活発な相互作用は注目に値する。しかしそれは逸脱や付け加えであって、テキストの大筋には影響しないのではないか。私がみてきた奄美の掛け合いのように、歌のやりとりの1節ごとに脈絡が形成されていく局面はあるのだろうか。基本は短詞型歌謡の掛け合いなのか長詞型歌謡なのか、さらなる分析を重ねてほしい。

独り歌ではあるものの、途中様々な霊が出てきて声色が変わり、「一人多役」を演ずるという現象も興味深い。どこから別の霊に変わったのか、類推がつかない場合もあるという。シャーマンは直接の憑依と「翻訳」の間、様々な人称の間をゆれ動く。そのナラティブの様態は、より具体的なテキストの提示によって明らかにされることだろう。

ともあれかつて生明 [あざみ] 慶二が、音声文化圏の「言語機能音階性」として論じた不定型な「語りうたい」の動態、またS. フェルドの重厚な霊の歌の地図を想起させるような研究であり、さらなる進展に期待したい。質疑ではその他、カオ・ザウという状態はグラデーションなのか、入る・出るというように一線を画すものなのか、「翻訳」行為をシャーマニズムといえるか等、活発な議論があった。シャーマンによる解釈行為とはいえないだろうか、トランスの質も含め充実した議論をのぞみたい。

(酒井 正子 記)

《研究講演》

**"Music of The Toba Batak People of North Sumatra:
Concept, Aesthetic and Performance Practices"** (北スマトラ、
トバ・バタックの音楽——その概念、美学、演奏慣習をめぐって)
Rithaony Hutajulu (University of North Sumatra)
リタオニ・フタジュル (北スマトラ大学)

〈報告〉

講演は、インドネシア、北スマトラのトバ・バタックの音楽文化について歴史を追って概説するものだった。以下、内容の要約と若干のコメントを記す。

11世紀までのトバ・バタック社会におけるヒンドゥー文化の影響は、伝統音楽の演奏者を Batara Guru とヒンドゥー神の名で呼ぶことにも表れる。19世紀半ば以来のドイツ・ルーテル派によるキリスト教布教の結果、トバ・バタックの90%がキリスト教化し、このことはトバ・バタック社会や文化の西洋化、近代化に影響を及ぼした。

トバ・バタックには2つの伝統的器楽合奏があり、1つは野外演奏用の“gondang sabangunan”で、楽器編成は taganing (調律可能な5個1組の太鼓)、gordang (低音太鼓)、sarune bolon (オーボエ系楽器)、ogung (4個のゴング)、hesek (ガラス瓶や金属片で拍を刻むもの)。もう一つは屋内演奏用の“gondang hasapi”で、hasapi ende と hasapi doal (各々メロディーとリズムを担当する2弦楽器)、garantung (木琴)、sarune etek (クラリネット系楽器)、hesek を用いる。これらの器楽は楽器や編成は異なるが、メロディー+リズムオスティナートの音楽構造や、導入、中心部、コーダの形式は同じで、レパートリーも共通である。しかし、儀式で2つの器楽を同時に演奏することはない。

gondang の音楽的特徴は、5音音階、狭い音程の短いメロディーフレーズを反復するものと長く引き伸ばすものと2種類のメロディー型、ヘテロフォニー演奏、シンコペーションのリズム型オスティナート、5種類のテンポの使用などで、即興演奏はしない。

1860年キリスト教宣教開始以来1935年まで、gondang演奏は伝統宗教との関連のためプロテスタント教会から禁止され、代わりに吹奏楽やオルガンが用いられた。

吹奏楽は、1970年代に都市に移住したトバ・バタックの間では慣習法儀礼にも使用された。讃美歌やポピュラー曲、他の民族集団の曲も演奏されたが、その際も“ゴンダン演奏”と呼ばれた。

大衆的なジャンルとしては、1925～35年にかけて、マレー半島の音楽劇などの影響から Opera Batak という音楽芝居が誕生した。“uning-uningan”と呼ばれる Opera Batak の音楽は、トバ・バタックの伝的器楽 gondang や哀歌、歌唱などを基本としながらも、自由な展開が見られ、ジャワやバリなども含むインドネシアの他の民族集団の音楽や、インド映画音楽、メキシコのポピュラー音楽などを借用した曲が作られた。楽器についても、8～16鍵の木琴や、西洋音階の sulim (竹笛)、hasapi の新しい調弦などが用いられた。概して西洋音階の曲が増えた。キリスト教讃美歌の影響によるハーモニー合唱、装飾音の多用やユーモラスな演出なども行われた。女性が、sulim や時には taganing を演奏することもあった。

しかし、1970年代以降1980年代には、カセットやラジオの普及等のため巡業劇団としての Opera Batak は衰退し、観光用、舞台演奏へと変化して行った。

講演後、調律可能な太鼓のセット taganing の由来、及び、Opera Batak 音楽へのインド映画やメキシコ音楽の影響について質問があった。前者については他地域に類似例はあるものの関係は不明、後者については20世紀初頭スマトラ社会における外国からのポピュラー文化の普及は想像以上に盛んであったことの説明があった。

ジャワやバリの音楽に関する情報に比してインドネシアの他地域のそれは極端に少ない。トバ・バタックの民族音楽研究者による、伝統的器楽 gondang よりもポピュラージャンルに重点を置いた今回の講演は意義深かった。トバ・バタック社会の近代化の過程で生まれ、やがて衰退した大衆歌芝居の様相から窺える当時の植民地主義への反発、ナショナリズムの高揚と西洋化の関係など、研究面からも興味深いテーマを含

んでいるのではないか。

(岡崎 淑子 記)

* * * * *

■入会申し込み・住所変更について

(社) 東洋音楽学会への入会をご希望の方は、80円切手を同封し、下記の学会事務所へ入会案内・申込用紙をご請求ください。申込用紙は、ホームページからもダウンロードできます。会員の異動や住所変更等についても、下記の学会事務所へお知らせください (申し出先は支部事務局ではありませんのでご注意ください)。

社団法人 東洋音楽学会 学会事務所
〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル307号室
TEL 03-3832-5152 FAX 03-3832-5152
ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog>

■研究発表の募集

西日本支部定例研究会での研究発表を希望される方は、発表種別（研究発表・報告等）、発表題目、要旨（800字以内）、氏名、所属機関、連絡先（住所、電話、FAX、E-mail）を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

(社) 東洋音楽学会 西日本支部事務局
〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1
神戸大学国際文化科学研究科 寺内研究室気付
TEL 078-803-7454 E-mail naokotk@kobe-u.ac.jp

支部だより 第72号

発行：(社) 東洋音楽学会 西日本支部 編集担当：今田健太郎・志村哲
〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 1-2-1
神戸大学国際文化科学研究科 寺内研究室気付
TEL：078-803-7454 E-mail： naokotk@kobe-u.ac.jp